

古墳時代における軍事組織について

The Archaeological Analysis of Military Organization
in the Kofun Period

田中晋作

はじめに

- ①古墳時代前期後半における軍事目的の変化
- ②常備軍成立の可能性について
- ③武器の副葬に特化した古墳の出現
- ④古墳時代前期後半から中期における軍事組織の特質

【論文要旨】

今回のシンポジウムで与えられた課題は、古墳時代の軍事組織についてである。小論の目的は、この課題について、今までに提示してきた拙稿をもとに、とくに、古墳時代前期後半から中期を対象にして、①古墳時代前期後半以降にみられる軍事目的の変化、②中期前半に百舌鳥・古市古墳群の被葬者集団による常備軍編成の可能性、③中期における軍事組織の編成目的について検討し、つぎの私見を示すことである。

前期後半、それまでの有力古墳でみられた示威や防衛を目的とした武器が、一部の特定古墳で具体的な武装形態を反映した副葬状況へと変化する。この変化は、既存有力古墳群でみられるものではなく、この段階で朝鮮半島東南部地域の勢力とそれまでにない新たな関係を結んだ新興勢力の中に現れるものである。

中期に入り、百舌鳥・古市古墳群の被葬者集団によって、形状および機能が統一された武器の供給がはじまり、大規模な動員を可能とする基盤が整えられる。この軍事組織の編成を保障するために、両古墳群の被葬者集団の特定の人物もしくは組織のもとに、人格的忠誠関係に基づいた常備軍が編成される。

さらに、武器の副葬が卓越する一部の古墳で、移動や駐留を可能とする農工具を組み込んだ新たな武器組成が生まれる。このような武器組成は、国内に重大な軍事的対峙を示す痕跡が認められないことから、計画的で、遠距離、かつ長期間にわたる軍事活動を視野に入れた対国外的な組織の編成が行われていたことを示すものである。

以上の検討結果によって、古墳時代前期後半以降にみられる軍事組織の編成は、政治主体が軍事力の行使によって解決を必要とした課題が、それまでの対国内的な要因から、朝鮮半島を主眼とした対国外的な要因へと変化したことを示していると考える。